

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23601020

研究課題名(和文) 言語とコミュニケーションスキル発達の生態学的基盤としての環境の記述

研究課題名(英文) Ecological Details on Environment as the Foundation for Developing Language and Communication Skills

研究代表者

鈴木 健太郎 (SUZUKI, Kentaro)

札幌学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：10308223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：乳児の前言語的発声が、養育者と物を含む家庭の環境でいかに発語・発話という形態へ変容し、言語が立ち上がるのかという言語発生の問題に、「養育者による支援的な関わり」と「乳児による探索的・遂行的な物への関わり」に焦点を当ててアプローチした。生後6カ月齢～2歳にある乳児と母親とのやりとり場面のデータを取得し、母子の物を介したやりとりについて、1)母子双方の行為と発話の連続的な展開、2)物の配置変化を伴う展開、3)両者による協同の展開の詳細を調べた。母親の働きかけ、乳児の自発的行為、物の配置変化の制約、協同の多様なパターンなどが示され、家庭という発達環境に潜在する資源が記述された。

研究成果の概要(英文)：With the objective of discussing how language ability emerges in infants through everyday interaction with parents playing with toys together, we analyzed video recordings of toy-based interactions between an infant-mother pair made over a 6 - 24 month period. The analysis focused on "supportive interactions by the parent with the infant," and "exploratory and performatory interaction with objects by the infant." We observed the interactive process between mother and child with toys by firstly recording the continuous progression of actions and speech by both the mother and infant. Secondly, we described the interactive development accompanying changes in the position of objects, and thirdly, we described the development of cooperative activities between both mother and infant.

研究分野：発達心理学

キーワード：言語獲得 発達環境 母子コミュニケーション 生態学的記述

1. 研究開始当初の背景

(1) 乳児に言語が発生する以前から、養育者との言葉を伴った相互行為は日々行われている。乳児が玩具などの物を扱う展開に沿って、そばでみている母親が逐次言葉をかける場合などである。このような養育者と乳児とのやりとりを日々重ねるうち、乳児の意味をなさない声が、いつしか言葉となる。本研究の開始当初より、言語発達の初期の過程にあること、すなわち、この言語発生という現象に迫るために、次にあげる二つの理論的見地をとっている。その一つが、乳児における言葉の発生について、Vygotsky に代表される社会的相互行為過程にその起源をもとめる見地であり、もう一つは、Gibson, J.J.(1979) の環境適合を重視する知覚理論を基礎に、言葉の発生を人間環境へ適合するコミュニケーションスキルの発達上に位置づける見地(Reed,1996)がある。理論的な代表者に依拠して、前者はヴィゴツキアンアプローチ、後者はギブソニアンアプローチと呼ばれ、言語発達理解の有望な見地として注目されている。さらに、両アプローチの総合を試みた言語発達研究もなされている(Zukow-Goldring, 1997)。

(2) ヴィゴツキアンアプローチの見地では、個体発生上の発達メカニズムには社会的相互行為過程が必要であり、認知能力はそこから出現すると考える。この立場では、大人と子どもが創出する対人的な社会空間が重視され、最近接発達領域 (zone of proximal development: ZPD) の見解にみられるように、特に大人の指導的援助的関わりが、子どもの発達可能性を押し上げるとする(Vygotsky, 1934)。このZPD概念に沿って、Bruner は、母子のやりとりが子どもの前言語的コミュニケーションスキルを言語使用へと移行させる基礎を作り出すと主張し、母親の行動が子どもの発達を促すという意味の“足場架け(scaffolding)”概念を提起した(Wood, Bruner, & Ross, 1976)。

Valsiner(1997)は、Vygotsky や Bruner によって強調される大人の役割とともに、子どもや環境の果たす役割を含み込んだ見解を発展させている。Valsiner によれば、発達システムの現在の状況は、環境内の諸範囲にある諸対象を利用できる自由領域 (zone of free movement: ZFM) と特定範囲の行為が促進される制約領域 (zone of promoted action: ZPA) の複合系 (ZFM/ZPA complex) であり、Vygotsky から狭義に援用したZPDは、その複合系で大人の援助を得つつ環境と築き得る発達可能性の領域を意味する。この見解から、言語の発生のような認知能力の出現は、子どもと関わる大人の振る舞い、子どもの身体的活動、そして、子どもの行為を方向付け促進する環境とが複合した発生機序によるものであるとの示唆が得られる。

(3) ギブソニアンアプローチの見地では、環境の物体、場所、事象に関して可能な生活体

自身の行為機会(affordance)を探索・検知する知覚システム(Gibson, 1979)と、生活上の様々なタスクの遂行のために組織される行為システム(Reed,1996)の両者の働きを重視する。発達とは、知覚と行為、言い換えるなら、環境資源の探索と利用を含んだ、環境と適応的に関わる活動のスキル化ということになる。この立場をとる Reed(1996)によれば、言語発達の舞台は、人・選択された物・場所・事象によって構成された社会文化的な環境なのである。そして、乳児の言語発生をもたらす経験の主な舞台は、養育者との相互行為が日々営まれる「乳児-養育者領域」であり、そこは、発声や発語を含む乳児のコミュニケーション行動にある範囲の自由度と選択的な促進をもたらすような発達の作用場なのである。

(4) 前者のアプローチは、子どもの能力や取り組む課題に細やかに対応する養育者の支援的な関わりに焦点があり、後者のアプローチは、子ども自身による周囲への積極的な関わりに、すなわち、周囲への探索な活動と物や他者に自発的に関わる遂行的な活動に焦点がある。これらの観点に依拠した試行的研究では、1歳5カ月の乳児と母親との数分間のやりとりについて母子の発声・発話と対象操作を主とする行為の流れを分析し、乳児の発声・発語を促進する数種の展開パターンを抽出した(鈴木・山崎・石黒, 2010)。それらには、母親の発話中の一部の語の強調部分を乳児がなぞるなどの、乳児の発声を引き出す展開パターンや、乳児の単発の無意味な発声に母親が応答するなどの、乳児の声を相互行為に引き込む展開パターン、さらに、乳児の行為の展開や結果に母親が逐次コメントするなど、乳児の行為を言語的な相互行為に引き込む展開パターンもあった。

2. 研究の目的

本研究は、乳児の前言語的発声が、養育者と物を含む家庭の環境でいかに発語・発話という形態へ変容し、言語が立ち上がるのかという言語発生の問題に、ヴィゴツキアンアプローチとギブソニアンアプローチとの両方から取り組むものである。前者の焦点である「養育者による支援的な関わり」と、後者の焦点である「物や養育者への乳児による探索的・遂行的な関わり」を切り口とした。

喃語から一語発話、二語発話へと移行する生後6カ月齢～2歳にある乳児と母親とのやりとり場面のデータを取得し、母子の物を介したやりとりを分析することで、1) 母子の行為と発話の展開、2) 物の配置変化を伴う展開、3) 母子の協同の展開という各水準で、乳児に言語発生をもたらす言語的体験要素を抽出し、家庭という言語発生の基盤となる発達の場としての環境を記述する目的とした。

3. 研究の方法

家庭での母子のやりとりを縦断的に記録

した映像データ（本研究では、「言語発生研究プロジェクト映像データ」と呼称する）を収集し、それらに記録された母子やりとりの微視的な展開を観察・分析した。北海道在住の母子3組について、乳児が生後6カ月から24カ月までの期間に毎月一回、調査者が家庭を訪問し、二台のカメラで母子のやりとり場面の映像を記録した。

記録した母子やりとり場面は、以下の三セッションであった。第一セッション(S1)は、家庭にある玩具で8分間のやりとりを行うものがあった。それに続く第二セッション(S2)は、調査者の用意した玩具セットを用いて8分間のやりとりを行うものであった。玩具セットは、図1（中段）に示したように、振ると音が鳴るもの、積み木、木の車、絵

合わせ、小さな木の人形とぬいぐるみで構成されていた。第三セッションでは、第二セッションの玩具セットに加えて、絵本セットを用いてやりとりを8分間行うものであった。母親には、主として絵本を用いたやりとりをするよう事前に指示した。絵本セットは、図1（下段）に示したように、七種の1～2歳向けの市販絵本で構成されている。玩具セットと絵本セットのセット間の配置と、セット内の配置はセッション毎に変えた。

4. 研究成果

調査によって取得した「言語発生研究プロジェクト映像データ」のうち、1組の母子の毎月のS1とS2の映像データを、以下に報告する三つの観点で詳細な分析を行った。

分析対象とした家庭の乳児は男児であり、家庭には調査期間を通して、音のでる玩具が複数あり、母親はそれらを積極的に、効果的にやりとりに取り入れていた。音のなる玩具を介したやりとりは、母子の協同的展開を調べた第三の分析で詳しく扱った。

(1) 母子の行為と発話の展開

物を介した母子のやりとりでは、双方の行為と発話が同時的、連続的、あるいは交互に多様に展開する。母子のやりとりが、双方の行為と発声によって展開する特徴的な仕方を、生後6～9カ月、10～12カ月の各期

間の映像データよりピックアップし、母子やりとりの質的变化を推察した。

①生後6～9カ月の映像データより、特徴的な母子の行為と発声の展開をピックアップした。6カ月齢のS1では、母親が乳児の体をくすぐりつつリズムカルな発声する、あやう動きにあわせて歌うなど、母子の密着した動きで生じた体感的な出来事と母親の発声とが共起するパターンがみられた。S2で母親が背後にまわり同じ向きに密着して座る構図が多くみられ、母親は、乳児の手に外側からかぶさるようにして玩具の提示や操作をした。玩具を振って音をだしたり、物の操作にあわせて発声したり、操作事象に続いてそれに言及して発話する展開がみられた。体が密着しているために、母親のリーチング等の操作と共に乳児も動くことになり、母子一体の行為で音や発声と共に共起する事象を経験する形にな



図2 母親のあやう動きとリズムカルな発声の共起

っていた。母親の発話は、この母子一体の行為の展開に関する

ものが多く、積極的な行為の展開が発話トピックを生み出していた。

7カ月齢のS1では、母親が、乳児の手の届くところに玩具をもってきては、それについて発話するパターンが多く、S2では、母親が積み木を積み上げるなどの行為の進行や展開にあわせて自ら発声・発話するパターンがあり、母親の行為や運動とともに作り出される出来事から新たな行為や発声の機会が生まれる仕方で、相互行為を持続させていた。ただし、乳児と分離した行為が増加した。

8カ月齢のS1では、顔を隠した物をどけてバアーと発声するなど、知覚的な変化と母親の発声の共起するパターンがみられた。母親の提示する玩具が、乳児のリーチング領域からはずれ、その操作とそれに関する発話を乳児が手を出さずに観察するパターンがみられた。S2では、乳児の自発的な行為を母親が観察しつつ、その進行や結果に言及するパターンがみられた。どちらのセッションでも、母親が複数の物を乳児の前に配置する行為や複数の玩具を組み合わせてつかう行為がみられた。

9カ月齢のS1では、「オキテ」の声かけの後に起こすなど、続く行為事象に予期的な母親の発話がみられた。前月に続き、母親が玩具をつかってみせるのを手を出さずに見るようになった。母親が「コウヤッテ」などと発話しながら実演した後、乳児の発話を待つパターンがみられた。S2では、「コレハ」などの指示・問いかけの発話や「トッテ」などの要求の発話の後、乳児の行為を待つパターンがみられた。

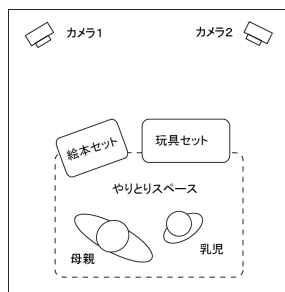


図1 全体構図(上段)・玩具セット(中段)・絵本セット(下段)の配置例

以上のように、生後6-9カ月の期間の母子の行為と発声の展開は、母子一体的な構図から始まり、乳児は、物、行為、事象と共に母親の声を知覚する体験を重ねていた。そして、展開の仕方は、徐々に両者の行為が分離する構図へと変わり、両者のやりとりが、専ら母親の積極的な行為の展開と発話によって組織される様相から、部分的ではあるが乳児の行為の進行・展開が関与する様相へと移行していた。

生後10~12カ月の映像データより、特徴的な母子の行為と発声の展開をピックアップした。10ヵ月齢のS1では、玩具や毛布などの異なる物を用いたイナイナイバアーを積極的に繰り返すなど、母親が同じ発声を伴う出来事を多種の物で繰り返し再現していた。S2では、母親が高く積みあげた積み木を見



図3 玩具を扱う母子

るように声かけをするなど、自らの行為の産物へ乳児の注意を方向付けるパターンもみられた。S1・S2の両者で、乳児が玩具を自発的・積極的に選択・操作する場面があり、それらの行為の多くに母親が手をださずに言及する発話を行っていた。母親が玩具で音を鳴らすなど、物の操作の実演がみられた。そのうちS1では、母親の実演を観察する場面がみられた。母親が乳児の身体に触れることによって、乳児の注意を方向付ける場面もあった。

11ヵ月齢のやりとりには、母親の積極的な働きかけに続いて、乳児の行為や発声が続く展開、さらに母親の発話が続く展開の場面が複数みられた。S1では、母親が玩具を扱いながら発話して乳児の注意をそれへひき、乳児が手を伸ばす・操作すると、母親がほめる声かけをする場面があった。発話のほか、手拍子、リズムやメロディのある発声や体の動きで乳児の同調を積極的に誘い、乳児が動きを合わせる動作をするとほめる声かけする場面があった。母親が玩具を、みせる・かくす、ゆする、たたくなどをするによって乳児の注意をひく出来事をつくる場面がみられ、それに対して乳児の発声が続く場合もあった。S2では、母親が音の鳴る玩具で乳児の注意をひく場面や、母が擬音の発声(ペタンなど)を交えて玩具の操作を実演するのに続き、乳児が母親と同様の操作を行う場面があった。こうしたやりとりに乳児の発声が伴う場面があった。乳児が音の鳴る玩具を扱うと、母親が同種か別の音の鳴る玩具を扱い、「イイオトダナー」などの共感を伝える声かけもあった。

12ヵ月齢のやりとりには、前月と同様に、母親が物を操作してみせる実演に続いて乳児が行為する場面、その行為に言及する母親

の発話がある場面が複数みられ、そこからさらに、やりとりが展開する場面もあった。S1では、母親がメロディの鳴る玩具に合わせて、手拍子、体を揺する、リズムに合わせてたたく、フエをふく、などをして、それにつられ、乳児がラッパを自発的にふく展開の場面もあった。S2では、母親が、音の鳴る玩具の実演をして、乳児に行為をすすめる発話に応じて、乳児が操作し、さらにそれに対する母親の発話(イイネエなど)に応じて、乳児が発声する場面があった。乳児が玩具を扱うのに、母親への一瞥を交え、その操作に母親のイイネなどと言及する発話があった。この乳児の一瞥から推察されるように、乳児の自発的な行為が、母親が見ることを意識してなされていた。

以上のように、生後10-12カ月の期間の母子の行為と発声の展開は、母親が乳児の行為を観察しそれについて言及する発話をする場面、そして、乳児が母親の行為を観察する場面が多くなった。そして、これらの母子相互の観察と行為が、少しずつ両者のやりとりをより長く持続するものへと発展させていた。母親は様々な手段で、一つのやりとりへの乳児の注意の方向付けを細やかに行っていった。

(2) 物の配置変化を伴う展開

生後6ヵ月から16ヵ月のS2について、物の配置変化を伴うイベントが母子のやりとりを構造化する側面を調べた。

生後6ヵ月から16ヵ月のS2において、玩具セットの中でもっとも総接触時間の長かった積み木セットを用いた母子のやりとりを分析した。積み木セットは、数個の箱が入れ子状に重ねられたもので、円柱型と立方体型の二種が用意されていた。

積み木が使用された場面について、積み上げること(「積」)と積み上げたものを崩し倒すこと(「崩」)からなる積み木の配置変化、「積-崩イベント」を分析した。積み木の上に積まれた小人形や鈴なども積まれるものも含めた。期間を通して積まれた玩具の総数は146個で、母親によるもの144個に対して乳児によるものは2個と、「積」のほとんどが母親によってもたらされた。次に、積まれた玩具が崩された総回数は61回で、母親の接触によるものが10回、乳児によるものが49回、両者によるものが2回と、「崩」は主に乳児によってもたらされた。期間を通しての「積-崩イベント」の生起回数は総計54回であった。7ヵ月齢では計15回あり、前半に積載個数5個の「崩」が連続する場面があり、すべての「崩」の後に残った積載個数は0であった。8ヵ月齢では計10回あり、すべて3個以上積み上げた状態から「崩」が生じていた。9ヵ月齢では計6回あった。10ヵ月齢では計7回あり、終盤において比較的短いインターバルで繰り返し生起した。11ヵ月齢と12ヵ月齢では、それぞれ1回のみ生起した。14ヵ月齢には計5回あったが、すべて

積載個数は1個であった。16カ月齢では計9回あり、終盤に生じた7回は比較的短いインターバルで繰り返し生じていた。積載個数が多い状態から少ない個数の崩れであるのが特徴的であった。13カ月齢には生じなかった。全体として、「崩」が生じた時に積み上げられていた玩具の個数にはばらつきがあり、これらのイベントを制約するような、一定の個数に達した時に崩すというような決まりごとはなかった。また、「積-崩イベント」は繰り返し生じ、時間的にまとまって起こる傾向が強かった。

「積-崩イベント」を生起させた母親と乳児の行為を分類し、それらの実際の生起場面を詳しく分析した。第一に、観察の初期に多かった偶発型「崩」(乳児の偶発的な接触による場合)で、「積-崩イベント」がどのように母親と乳児のやりとりに登場してきたのかを調べた。母親は、初期には乳児の身体に非常に近い場所に玩具を積み上げ、後には離れた場所に積み上げるというように、積み上げの位置によって乳児の身体と玩具の接触の機会を調整していた。第二に、完了型「崩」(乳児の意図的な接触により完了する場合)に注目し、繰り返される「積-崩イベント」へと予期的に参加している場面を分析した。この時、乳児と母親は、眼前に成立している配置にある行為の機会だけではなく、「積む」によって「崩す」の機会が生じるように、物の配置の変化によって法的に生じる行為の機会をも利用して、やりとりを組織していることが示唆された。第三に、接続型「崩」(乳児の意図的な接触によって崩された玩具に、次の動作が接続して生起する場合)に注目し、乳児による「崩」が埋め込まれたイベントの構造の変化を調べた。その結果、固定的パターンである完了型「崩」が成立して以降、一つの「積-崩イベント」から接続型「崩」が多様に展開する傾向が見いだされた。

以上のように、積み木で遊ぶ母子のやりとりが、「積む」・「崩す」ことによって変化する物の配置の制約を受けながら組織され、乳児の「積-崩イベント」展開を予期する学習がすすむと定型的な「積-崩イベント」からより多様で複雑なやりとりへと進展する発達の流れの一面が記述された。

(3)協同の展開

乳児が大人と一緒に玩具遊びをする場面



図4 三パターンの「崩」

を観察した石黒(2013)が指摘するように、相互行為には、両者が互いの行動を観察し合いながら行為を相互調整し、やりとりが構造を持った出来事へと組織される「協同」の展開がある。先述の(1)の成果から、12カ月齢で音のする玩具を鳴らすという「協同」の形態が初めて現れた。この分析では12カ月～14カ月齢のデータをもとに、母親が乳児の行為を協同の展開にいかに関与するかを調べた。

生後12カ月齢のS1では、「母親が歌絵本の奏でるメロディに合わせてリズムカルな動きや手拍子をし、乳児が自発的に玩具のラッパを吹く」展開の持続があり、S2では、「母親が鳴子をカタカタふってみせてから乳児に手渡してすすめ、乳児がそれを振り、母親はその行為にほめる発話を返す」展開などがあつた。生後13カ月齢のS1では、「母親が歌絵本のメロディをONにし、音の鳴る玩具をリズムカルに奏でてから乳児に渡し、乳児がそれを扱い、母親がもう一つの玩具を引き寄せて乳児と共に音を奏でる」共演の展開などがあつた。母側の調整が主であるが、両者の相互行為が同調する「協同」展開の形を呈した。「母が取り出した電話の玩具によるやりとり」は見立てをふくんだ話者交代のテンポよい展開を含んでいた。S2では、「乳児が積み木を自発的に選んで扱うのを、母親が手や発話で支援する」協同の展開がみられた。生後14カ月齢のS1では、「母親が自販機の玩具の扱い方をガイドし、乳児がそれを試みる」展開にあわせて母親の発話や乳児の発声が差し込まれた。「乳児が渡した玩具の缶を母親が自販機に装填し、子がボタンを押して取り出す」分業の展開が、S2では、「母親が柘形(たたく)の積み木を逆さにした底面を太鼓のようにたたき行為の実演に並行して、乳児が手にもった積み木で同様にたたき」共演の展開があつた。上記のように、生後13・14カ月では、行為の同調、支援、分業の形式で、単発的だった乳児の行為が時空間的に広い見通しで行われていた。

上述したいずれの「協同」イベントの成立にも、母親による積極的なガイドや調整が不可欠であるが、一方で、乳児の行為はそれら「協同」イベントの創出にいかに関与しているのだろうか。生後13カ月齢S1で抽出した母子による音の共演イベントを分析したところ、基調となる歌絵本のメロディの合計66小節のうち、それに合わせた母親のみのたたきが28、乳児のみが8、二重奏が30あつた。乳児は流れるメロディに応じて積極的に音をだし、それを母親の介入する音で整える仕方が主な協同の展開であつた。おおまかな応じ方で、しかし、積極的な行為で協同に貢献していた。

(4)本研究では、母子の行為と発話の展開、物の配置変化を伴う展開、母子の協同の展開の各観点で、言語発生の基礎経験をなす家庭での母子のやりとりの詳細を記述した。乳児、

養育者、玩具、部屋といった平凡な構図の中に、乳児の言語とコミュニケーションスキルの発達を推進する豊かな経験の機会があり、それは発達の場合と置き換えることができるだろう。本研究で得られた記述は、限定的ではあるが、言語の発達場の本質に触れるものであったと考える。

<引用文献>

Reed, E. S. Encountering the world: Toward an Ecological Psychology. Oxford University Press.1996.

Zukow-Goldring, P. A social ecological realist approach to the emergence of the lexicon: Educating attention to amodal invariants in gesture and speech. In C. Dent-Read & P. Zukow-Goldring (Eds.), Evolving explanations of development. American Psychological Association.1997. pp. 199-250.

Valsiner, J. Culture and the development of children's action: A theory of human development. New York:John Wiley & Sons,Inc. 1997.

鈴木健太郎・山崎寛恵・石黒広昭、乳児の発話を形成・促進する相互行為の場の記述：言語発生過程分析（2）、日本発達心理学会第21回大会発表論文集、2010年、528頁

石黒広昭、実践される文化：子どもの日常学習家庭における大人との協働、河野哲也（編）知の生態学的転回 3 倫理 人類のアフォーダンス、東京大学出版会、2013年、237-265頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

青山慶・佐々木正人・鈴木健太郎、他者の意図理解の発達を支える環境の記述：母子によって繰り返される積み木遊びに注目して、認知科学、査読有、Vol.21, No.1、2014年、125-140頁

〔学会発表〕(計7件)

青山慶・佐々木正人・鈴木健太郎、母子による配置換え行為における声掛けの変化：言語発生過程分析（12）、日本発達心理学会第25回大会、2014年3月21日、京都大学（京都府京都市）

鈴木健太郎・石黒広昭・山崎寛恵・蓮見絵里、言語発生時期の母子相互行為に観察される協同の展開：言語発生過程分析（11）、日本発達心理学会第25回大会、2014年3月21日、京都大学（京都府京都市）

青山慶・佐々木正人・鈴木健太郎、乳児の言語獲得を取り囲むイベントの記述と分析：言語発生過程分析（10）、日本生態心理学会第4回大会、2012年7月7

日、公立はこだて未来大学（北海道函館市）

鈴木健太郎・石黒広昭、生後10-12カ月の乳児と母親のやりとりにみる言語発生を促す作用の抽出：言語発生過程分析（9）、日本生態心理学会第4回大会、2012年7月7日、公立はこだて未来大学（北海道函館市）

佐藤由紀・石黒広昭・麻生武・鈴木健太郎、生後6-8カ月乳児における自発的ジェスチャーの原初の現れ：言語発生過程分析（8）、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月11日、名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）

青山慶・丸山慎・佐々木正人・鈴木健太郎、生後6-8カ月乳児の言語獲得を取り囲むイベント：言語発生過程分析（7）、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月11日、名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）

鈴木健太郎・青山慶・山崎寛恵・石黒広昭、生後6-9カ月の乳児と母親との相互行為にみる言語発生場の変化：言語発生過程分析（6）、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月11日、名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 健太郎 (SUZUKI, Kentaro)
札幌学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：10308223

(2)研究分担者

石黒 広昭 (ISHIGURO, Hiroaki)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：00232281

麻生 武 (ASAO, Takeshi)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：70184132

佐々木 正人 (SASAKI, Masato)
東京大学・教育学研究科（研究院）
・教授

研究者番号：10134248

(3)連携研究者

佐藤 由紀 (SATO, Yuki)
玉川大学・芸術学部・准教授
研究者番号：90568156

丸山 慎 (MARUYAMA, Shin)
駒沢女子大学・人文学部・講師
研究者番号：60530219

(4)研究協力者

青山 慶 (AOYAMA, Kei)
山崎 寛恵 (YAMAZAKI, Hiroe)
蓮見 絵里 (HASUMI, Eri)